文化

畳ギターで畳ソング

◇100種類近く制作、元気のない畳業界を盛り上げる◇

西脇一博

仲間とバンドを組み、休日は音楽活動にいそしんでいる。ライブハウスやカフェ、地域の催しものなど場所は様々だが、出演すると必ず観客の熱い視線を浴びる。僕がではない。僕の持つ「畳製ギター」が、だ。

▲▲▲

歌詞に込める畳の長所

もちろん楽器店では売っていない。京都市内で140年続く畳店を営む傍ら自作したものだ。その楽器を抱え、ライブに臨むのである。

バンド名は「日本畳楽器製造」。畳のすばらしさを知ってもらおうと、「足触りがいい」「い草はバニラの香りと同じ成分」といった畳にまつわる歌詞を盛り込んだオリジナルの「畳ソング」を歌い続けている。観客側から見れば、おそらく異様な光景だろう。

ギターだけではなく、ベース、ドラム、ハーモニカなどもある。「畳製」といっても、全部を畳で作るわけではない。音が鳴る形を最低限保ちながら、いかに畳を前面に押し出すかをポイントに楽器ごとに作り方を考える。

アコースティックギターの場合は、ゴザをギターの胴の形に切り抜いて既成のギターに貼り付ける。エレキギターの場合は、まず既成のギターの胴の出っ張った部分を切り、できるだけ小さな四角にする。そして畳に同じ大きさの穴を作ってはめ込み、好きな形に加工する。マイギターの一つは漢字の「畳」の形を模した、まさに畳ギターの王様ともいえるものだ。

畳をいかに目立たせるかを最重要視して作るのスティックギターは貼り付けたゴザに音が吸収され、通常の8割程度しか鳴らない。木の板にゴザを貼り付けて作る「畳ンバリン（タンバリン）」、「畳タネット（カスタネット）」も音が少ししか鳴らない。ドラムはたたく部分にも畳を張りたかったが、バンドのドラム担当から「音が鳴らなくなるのでやめてくれ」と懇願され、胴の部分だけで、僕にとっては何の問題もないのだがバンドのメンバーから難点を指摘されることがある。

▲▲▲

難点は音量と重量

まず第一に音量だ。エレキギターはアンプにつないで音を出すのであまり影響はないが、アコーで我慢した。

第二に重量の問題だ。楽器でありながら非常に重い。例えば漢字の「畳」の形を模したエレキギターは約10キロ。長さも人の背丈くらいあるため、持ち運びに向かないうえ、演奏は大変である。また史上最大のウクレレを目指し、東寺の五重塔を模して作った全長180センチのウクレレは、あまりの重量に先が折れてしまったことがあった。小さくて軽いウクレレの利点はないが、畳が前面に押し出された自信作だ。

▲▲▲

商売としては売れず

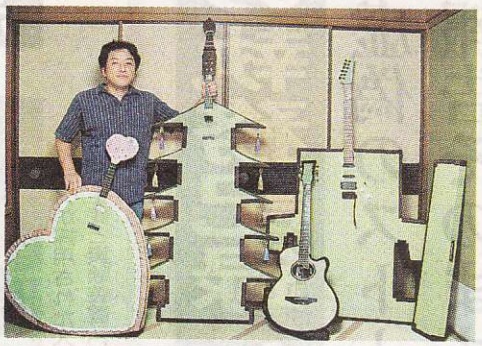
33歳で父の跡を継ぎ、以来10年間、変わった畳を作ることに情熱を注いできた。ここ3年ほどは楽器が多いが、これまでに創作したのは畳ハンガー、畳スケートボード、畳サーフボードなど100種類近くになる。午前8時から午後6時までは通常の畳を作る時間、それ以降は趣味の時間と分けて、創作にいそしむ。結局、1日のほとんどを畳作りに費やしている。

創作畳を始めたのは、「四角くない畳を作りたい」という思いを抑えがたかったからだった。通常、畳は四角く、お客さんからの注文も四角い畳ばかりだ。しかし作り続けるうち、同じ形の畳を作るだけでなく、違う形のものを作りたいという思いが募ってきた。「畳にも独自性があっていいはずだ」。そう強く思った。これが今に続く創作畳作りの出発点だった。

ただし、創作畳は商売としてはほとんど売れない。お客さんのニーズから生まれたわけではないからだ。それでも中には面白がってくれる人がいる上、何より僕自身が楽しいので続けている。

「今度は何を作ろうか」ということで頭がいっぱいのときは、京都の町が畳でできているように見えることがある。立ち並ぶビルや走る車、道路、そのほか何もかもがだ。畳を配達するトラックに書かれた「積載重量」の「量」の字が「畳」に見えることもある。それは僕にとって創作意欲が高まっているサインだ。

フローリングの住宅が増え、畳業界はここのところ元気がない。盛り上げるためにはいろいろな方法があると思うが、僕の場合は世間を驚かせる変な畳を作ることだと確信している。バンド活動もその一環だ。最近では、一家だんらんを題材にした「お茶の間ソング」や、家族のきずなについて歌う「家族ソング」も作っている。家族が集まるところには畳が似合う。そのすばらしさを楽器と音楽から"たたみ"かけていきたい。（にしわき・かずひろ＝西脇畳敷物店店主）



手製の畳楽器と筆者（右からハーモニカ、エレキギター、アコースティックギターとウクレレ2つ）